

環境教育の国際協力と教育者養成

小林 舞衣

キーワード：環境教育の国際協力、教育者養成、環境のための教育、批判的環境教育論、人間開発

1. 研究背景と目的

本稿は、国際協力における環境教育、またその教育者養成を研究対象としている。近年、環境教育の実践は国際協力にまで広がっているが、国際的な教育者を育てる研修は、JICA(国際協力機構)が環境教育分野でのボランティア候補生に行う研修に限られている。また、その研修に課題があった。加えて、環境教育分野において、国際協力に着目した研究、そして教育者養成に関する研究は、共に十分にされておらず、国際協力を想定した教育者養成の研究はこれまでなされてこなかった。

以上のことから、本研究における目的を次の二点に設定する。第一に、環境教育の国際協力に着目し、教育者養成の在り方を考察すること、第二に環境教育学における理論的な研究を行うこと、である。環境教育学な視点と国際協力的視点を組み合わせることで、環境教育の国際協力についての考察を行う。

2. 批判的環境教育

環境教育の国際協力と、その教育を担う教育者の養成のありかたを明らかにするために、第2章では、環境教育の言説の中でも特に環境教育の国際協力に適していると考え、批判的環境教育論を取り上げている。批判的環境教育論者として最も重要な人物であると考えられるジョン・フィエンの言葉を主に援用しながら、批判的環境教育論とはどのような言説なのかを見ていく。そして、環境教育の国際協力に批判的環境教育論の考え方が適していると考え、理由を、批判的環境教育論の特徴から述べていく。さらに、国際協力の場面における教育者を批判的環境教育論の観点から考える際に浮かび上がってくる、批判的環境教育論の課題を指摘し、改善点を提示している。そのことから環境教育の国際協力と、その教育を担う教育者を、批判的環境教育論から考察した結果見えてくる、求められる教育者の資質を明らかにした。

3. 潜在能力アプローチ

第3章では、新しい国際協力の言説の一つである「人間開発 (Human Development)」と、その根底にあるセンおよびヌスバームによる「潜在能力アプローチ (Capability Approach)」を取り上げている。この志向における福利を途上国の人々にとっての理想と捉えると、その実現を考える際に考慮すべき三つの項目がある。この三点についての考察を行うことを通して、環境教育の国際協力のあるべき姿、そしてその教育者に求められる要件を指摘した。

4. 結論

第4章では、第2章における批判的環境教育論の視点からの考察と、第3章の人間開発の視点からの考察をまとめることで、今まで語られてこなかった環境教育の国際協力における教育者の在り方を明らかにし、本研究の成果とした。また、本研究では十分に考察できなかった課題について触れることで、次なる研究の示唆を示した。